



|              |                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 小宇宙に込めた天囚の思い：種子島西村家所蔵西村天囚旧蔵印について                                                    |
| Author(s)    | 湯浅, 邦弘                                                                              |
| Citation     | 懐徳堂研究. 2021, 12                                                                     |
| Version Type | VoR                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/86294">https://hdl.handle.net/11094/86294</a> |
| rights       |                                                                                     |
| Note         |                                                                                     |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 小宇宙に込めた天囚の思い ― 種子島西村家所蔵西村天囚旧蔵印について―

湯 浅 邦 弘

### はじめに

結婚届や離婚届でさえ押印の廃止が検討されている昨今、はんこ（印章）の肩身は狭い。しかし、二千年以上の歴史を持つ印章の文化は、確たる意義があったからこそ、今日まで続いてきているのである。かつて日本の文人たちも、ごく普通のたしなみとして、自身の名や号を刻んだ印を持っていた。

明治・大正時代の漢学者西村天囚も例外ではない。天囚の旧蔵漢籍約三千冊から成る「碩園記念文庫」は、財団法人懷徳堂記念会を経て、現在、大阪大学図書館に収蔵されている（碩園は天囚の別号）。その漢籍を開いてみると、一冊ずつ天囚の蔵書印が鈴印けいんされているのが分かる。ただ、その印の実物はこれまで確認されてい

なかった。天囚はどのような印を持っていて、どのように使用したのかは謎に包まれていたのである。

ところが、天囚の郷里種子島（鹿児島県西之表市）の西村家で平成二十九年（二〇一七）から進めている現地調査において、天囚の旧蔵印約百顆かが発見された。そこには、碩園記念文庫の漢籍に鈴印かされている蔵書印も含まれていて、およそ百年ぶりに印記と印章との再会が実現したのである。また、天囚の名や号を刻んだ印の他、天囚の思想を端的に示すと思われる字句を刻んだもの、天囚の著作形成過程をうかがい知ることのできる印など、きわめて重要な印章が含まれていた。

そこで筆者は、この天囚旧蔵印を、現在の西村家の御当主である西村貞則氏より研究室に一時寄託していただき、全点の写真撮影ならびに整理調査を行った。

本稿では、その作業を踏まえて西村天囚旧蔵印の全容

を紹介するとともに、天囚が、印という小宇宙に込めた  
思いの一端を解明してみることにした。

## 一、西村天囚旧蔵印の全容

平成二十九年八月に初めて種子島の西村家を訪問した  
際、印章は、二つの箱に収められていた。一部には、紙  
のキヤップが作成され、破損を防いでいるが、緊急の調  
査と専用箱作成の必要性を感じさせる資料群であった。  
総点数は概算で約百顆。ただ、通し番号は附されてい  
なかった。一方、鈴印された巻紙（印譜）も同時に発見さ  
れ、その押印数は全六十三であった。

印文は、「天囚居士」「碩園」「子俊」「時彦」などの号  
や名のほか、「碩園珍藏」「小天地閣善本」「碩園収蔵楚辭  
百種」などが注目される。

この巻紙（印譜）を最後まで開いていくと、末尾に「東  
京都外下大崎二三四 西村時彦」の印が押されていた。  
とすれば、この印譜が作成されたのは、大正十年（一九  
二二）、天囚が宮内省御用掛に任ぜられ、同年十月三日、  
大阪から東京五反田下大崎の島津邸役宅に引っ越した後  
であることが判明する。すなわち天囚晩年の印譜である。  
なお、六十二番目の印記からこの住所印までの間にはか

りの余白がある。あるいは天囚は、さらに鈴印を追加  
することも想定していたのかもしれない。

また、西村家からほど近い場所にある種子島開発総合  
センター（通称鉄砲館）は、一五四三年に伝来したボル  
トガル製火縄銃など島内の貴重資料を保管・展示する博  
物館であるが、館内には西村天囚とその師の前田豊山を  
顕彰するコーナーもあり、そこに、十一顆の天囚旧蔵印  
が展示されている。これらについても、鉄砲館のご厚意  
により、研究室に一時拝借することができ、あわせて全  
点の撮影を行った。

そこでまず着手すべき作業は、この巻紙（印譜）に鈴  
印されているものと、西村家および鉄砲館に残されてい  
る印との照合である。

筆者の研究室に寄託していただいた全印章について調  
査し、その結果を一覧表にまとめた（本稿末尾の表1）。  
この表について説明する。

左端の番号は「通し番号」で、01～63までは、印譜の  
順番に沿って仮に付けた通し番号と対応する。「現存確  
認」欄に○がついているものは、種子島の西村家に残さ  
れていたもの、「鉄砲館」と記しているものは、種子島  
開発総合センター（通称鉄砲館）に展示されているもの、  
「西村家」とあるものは、印譜に鈴印されてはいないが、

西村家で発見されたもので、以上の合計で九十八顆となる。64以降は、印譜に鈴印されていないものである。印譜にあるものはほぼ確認されたが、11「臣時彦印」、30「村彦 天囚」の連印、31「非詩人」の三顆のみ、現時点で現存が確認されていない。

「篆刻」欄は、筆者が読み取った印面の字を記す。一部、現時点で判読できていない文字があり、「？」としている。「形状」欄は、方形印、楕円形印など、印の形状を示す。その右の「特殊形状」欄は、両面印、連印などの特殊な印であることを示す。印は通常、つまみ（紐）と印面から成るが、両面印とは紐の両方に印面があるもの。連印は、一つの印面に篆刻が二つあるもので、一度の鈴印で同時に二つの印を押すことができる。

次の「陽刻・陰刻」欄は、印面が陽刻か陰刻かを示す。陽刻とは、文字の部分が凸に彫られていて、押印すると文字が朱で示されるもの、逆に陰刻は、文字の部分が凹に彫られていて、押印すると文字の部分が白抜きになるものである。次の「匡郭」欄は、印文の枠（匡郭）の有無を記したものである。通常は、陽刻の印は匡郭を持ち、陰刻の印は匡郭を持たない。ここでは、匡郭のないものののみ「無郭」と記す。あとは「有郭」である。その次の「法量」欄は、印の実寸を縦×横×高さ（単位センチメートル）

で示す。

「側款」は、紐の側面または上部に刻印がある場合は○とし、「印材」は印の材質を示す。「紐」は特徴的な意匠が施されている場合に注記する。

このように、印譜に鈴印されていた印はほぼ種子島に現存していたことが判明したのである。また、鈴印されていた六十三顆以外にも、さらに三十顆余りの興味深い印があることも確認された。側款を見ると、「天囚先生」「邨大兄」「贈」などの文字が確認されるので、多くは寄贈された印であると推測される。天囚自身の篆刻が含まれるかどうかについては現時点で未詳である。ともあれ、天囚が多くの印を蔵有していたことは明らかになった。

## 二、蔵書印と碩園記念文庫本

確認された約百顆の印章中、最も重要だと思われるのは、多くの蔵書印である。48「小天地閣善本」、49「天囚鑑蔵」、50「碩園珍蔵先賢未刻書」、51「小天地閣珍蔵」、52「碩園収蔵楚辭百種」、53「山房手鈔本記」、54「紫駿翰墨」、55「碩園珍蔵」、56「碩園鈔蔵」、57「天囚書室」は、巻紙（印譜）にも近い場所に連続して鈴印されており

り、一連の蔵書印であったことが知られる。<sup>②</sup>

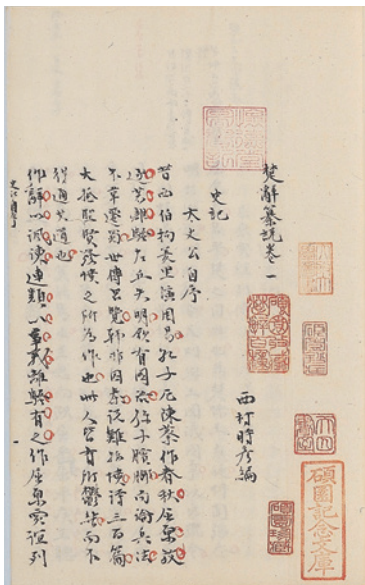
この内、「小天地閣」というのは、天囚の別号である。天囚は文献善本の写本叢書を編集し、「小天地閣叢書」としてまとめ、「小天地閣善本」や「小天地閣珍藏」などの蔵書印を鈐印した。乾集・坤集の計一四三冊からなる同叢書には、「懷德書院揭示」「履軒中井先生行状」「大阪府学五舍銘并序」「懷德堂記録」「史記雕題」などの懷德堂関係資料の他、広瀬淡窓「説論語」、猪飼敬所『論語標記』などの注釈書、「昌平覺書生寮姓名録」「浪華人物志」「鹿兒島県人物伝備考」などの貴重資料が収録されている。

特に「昌平覺書生寮姓名録」は、中井竹山手稿本の昌平覺（昌平坂学問所）書生寮の姓名録である。これを天囚が「小天地閣叢書」坤集に入れた。この資料は東京大学史料編纂所にもあるが、その異同を対照できる貴重な資料である。全一三〇丁。<sup>③</sup>

また、「楚辞百種」とは、天囚が収集した『楚辞』の善本コレクションである。天囚は晩年、特に『楚辞』の研究と資料蒐集に努めた。大阪市松ヶ枝町の自宅の書齋は『楚辞』にちなんで「百騷書屋」と名付けられ、清末の著名な考証学者俞樾の筆になる「讀騷廬」の扁額が掲げられた。<sup>④</sup>『楚辞』への思い入れが分かる。

この『楚辞』コレクションは百種近くに及んだため、「楚辞百種」と総称され、「碩園收藏楚辞百種」の蔵書印が鈐印された。これらは後に「碩園記念文庫」の一部として懷德堂に入った。昭和十一年（一九三六）には、中国の清華大学教授劉文典（一八八九—一九五八）が来堂し、この「楚辞百種」を中心とする碩園記念文庫の調査研究を行っている。本コレクションは、大阪大学懷德堂文庫に引き継がれ、現在に至っている。

一例として、懷德堂文庫所蔵「楚辞百種」の内、天囚自身の編集による『楚辞纂說』を取り上げてみよう。本文冒頭の第一葉に計七つの印記が見える。鈐印の先後関係にも留意して説明すると、まず天囚が自身の蔵書であ

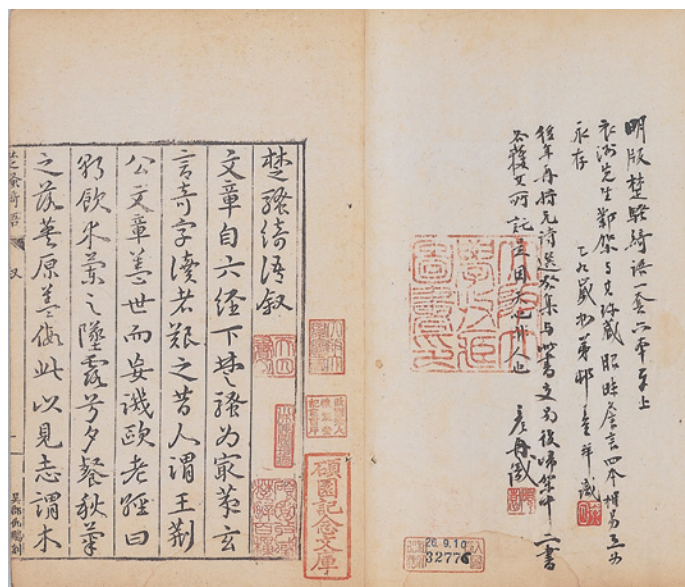


『楚辞纂說』の印記

ることを示す「天囚書室」「碩園珍藏」と、自身の抄写本であることを表す「碩園鈔藏」とを鈴印し、さらに『楚辞』の貴重コレクションであることを示す「碩園収蔵楚辞百種」印が押された。大正十三年（一九二四）に天囚が亡くなった後、これらの旧蔵書は懷徳堂記念会（重建懷徳堂の書庫）に収蔵されることとなり、「懷徳堂図書記」「碩園記念文庫」の印が懷徳堂記念会によって鈴印された。さらに昭和二十年（一九四五）の大阪大空襲で重建懷徳堂の講堂が焼失し、戦後、記念会の蔵書が一括して大阪大学に寄贈されるに至り、「大阪大学図書」の蔵書印が大阪大学によって鈴印された。こうした来歴をこれらの印記は示しているのである。

念のため、もう一例あげてみよう。これも懷徳堂文庫所蔵「楚辞百種」の内の『楚辞綺語』である。「叙」の冒頭葉に六つの印記が見え、来歴の順番に掲げると、「天囚書室」「小天地閣珍藏」「碩園収蔵楚辞百種」の三つは天囚による鈴印で、「碩園記念文庫」と「財団法人懷徳堂記念会印」は懷徳堂記念会によるもの。さらに、「大阪大学図書」は戦後の大阪大学による印である。また、右葉には天囚の識語が記されていて、そこには、陰刻の「天囚」印と陽刻の「碩園」印が確認され、大きな「大阪大学収蔵図書印」と昭和二十六年（一九五一）九月十

日付けの受入印も見られる。これは、昭和二十四年に大阪大学が懷徳堂記念会から懷徳堂文庫を一括して受贈した後、受入の手續きにかなりの時間を要したことを示している。昭和二十四年の段階で、大阪大学にはまだ図書



『楚辞綺語』の印記



館本館がなく、受け入れた懷徳堂文庫は、文学部の関係研究室や階段下の空間に分割して収蔵されていたという。図書館本館が竣工するのは、ようやく昭和三十五年（一九六〇）のことであった。そして、昭和五十一年（一九七六）刊行の『懷徳堂文庫図書目録』によって、その全容が知られることになったのではあるが、天囚の蔵書印については不明のままとなっていた。そして、このたびの調査により、その蔵書印の実物が約百年ぶりに発見されたわけである。

小野則秋『日本の蔵書印』（臨川書店、一九五四年）は、多くの蔵書印を集めて考察した労作で、西村天囚の蔵書印としては「碩園」「碩園珍藏」「天囚書室」「天囚図書」があったとする（ただし印影の掲載はなし）。渡辺守邦・島原泰雄『蔵書印提要』（青裳堂書店、一九八五年）は、「碩園珍藏」「天囚書室」の原寸印影を掲げ、中野三敏『近代蔵書印譜三編』（青裳堂書店、一九八九年）は「天囚書室」を、渡辺守邦・後藤憲二『新編蔵書印譜』（青裳堂書店、二〇〇一年）も、「碩園珍藏」「天囚書室」の二つを原寸印影で掲げる。

ただ、これらが天囚蔵書印のすべてではなかったのである。碩園記念文庫所蔵漢籍にはそれを遙かに上回る蔵書印が見られ、また種子島西村家にはそれに該当する印

が保管されていたのである。公的機関の蔵書印が保管されているのは当然としても、個人の膨大な漢籍蔵書と多くの蔵書印がほぼ完璧に残っているのは稀有な例であり、学術的価値は極めて高いと言えよう。

### 三、字・号に関する印

数量的に最も多いのは、やはり名前や号に関する印である。01「天囚居士」、03「西村時彦」、12「碩園」、24「子駿」を初め多数にのぼる。天囚は自筆署名する場合、西村の村を「邨」と書く場合もあるが、これらの印の中には「邨」と刻むものは見られない。

やや注意を要するのは、05の両面印などに見られる「紫駿」である。「子駿」は、81の印に「字曰子駿」とある通り、天囚の字として知られているが、「紫」も同音であるため、「紫駿」も字を示す印として使われていたことが分かる。

また、住居に関わる印も確認された。02「草不除軒」はこれまで管見の限り鈴印されたものを確認できていなかったが、自ら「浪華艸不除軒天囚西村時彦」と署名している資料が、このほど確認された。

それは、岡山県の倉敷市立美術館所蔵の御船綱手の画

帖「世界周遊実写 欧山米水帖」に天囚が依頼されて書いた題辞末尾の署名である。北宋の学者周敦頤は天地自然のままを好み、窓の前の草を刈らなかつたという。『二程遺書』卷三に「周茂叔窗前草不除去」と見える（茂叔は字）。天囚もこの故事にちなみ、大阪市北区松ヶ枝町の自宅をそう呼んでいたと思われる。この題辞の署名により「草（艸）不除軒」が天囚の別号であることが判明したのである。

同様に、09「松町老隠」や15「松町逸人」も、大阪の松ヶ枝町に住んでいたことによる自称であろう。この町名は、実際に松の老木があつたことに由来するようで、種子島の西村家に保存されている天囚関係のアルバムに、大きな松の木が写っている写真がある。

さらに、種子島出身であることや自身の家系に思いを致したと思われる印もある。21「平時彦印」、33「南島世家」、67「平時彦印」、79「左馬頭行盛裔」、93「左馬頭行盛之裔」などである。

天囚は、郷里種子島からの依頼により、大正十年（一九二一）、鉄砲伝来紀功碑文を撰文しているが、その冒頭に、「火器、古は鉄砲と称する者、今の所謂小銃なり。其の我が国に伝来するは三百八十余年前に在り。実に我が種子島氏より始まる。種子島は左馬頭平行盛朝臣よ

り出ず。其の子信基公、鎌倉の初め、南海十二島に封ぜられ、世々種子島を治む。因りて島を以て氏とす」と記している。

種子島の祖とされる「左馬頭平行盛朝臣」とは、平行盛（？―一八五）である。平清盛の次男の平基盛の長男で、左馬頭は官名。朝廷保有の馬を管理する馬寮（左馬寮・右馬寮）の内、左馬寮の長。朝臣は、もともと天武天皇の時に制定された八色の姓の第二位。のち、五位以上の人の姓名に付ける敬称である。

また、この碑文には、その種子島氏信基に六子があり、季の子の信時が初めて西村姓を賜つてこの地を采邑としたことが記されている。種子島の西村家に伝わっている家系図にも、西村家が平氏から出ているとされており、それを受けて天囚は、「平時彦印」と刻んだ印と、種子島氏の末裔であることにちなむ「左馬頭行盛裔」「左馬頭行盛之裔」印を持っていたと推測される。

「南島」はもちろん種子島のことであり、「世家」はそこに代々ある家という意味である。天文十二年（一五四三）、種子島に漂着した異国船に対応し、鉄砲伝来の仲介をした人物こそ、天囚の十三代前の祖先西村織部丞時貫であつた。



#### 四、思想と著作と印章と

この他、天囚の思いを感じることが出来る印として、16「天囚五十以逡文安」、18「懷古」、45「文章報国」、46「儒素傳家」などがある。

平成三十一年（二〇一九）、種子島の鉄砲館における資料調査で、筆者は、天囚の自筆草稿類を発見した。「五十以後文稿」と自筆で題した冊子に何種かの草稿が綴じられている。この「天囚五十以逡文安」印と呼応するよう興味深い。「逡」はしりぞく、次第・順番の意。種子島の草稿同様、「五十以後」の意味であろう。当時の文人にとって、やはり孔子の「五十にして天命を知る」（『論語』為政篇）は強い影響があり、人生の大きな区切りと考えられていたのではなからうか。

「懷古」は、天囚が大阪で復興運動を進めた「懷徳堂」を想起させる印である。中国古典文学、特に古典詩において、「懷古」が重要な主題として明確に意識されるのは六朝時代からであり、それが確立するのは唐代であるとされる。そこで詠じられるのは、過去の栄華を失って今は荒廃した姿に催す「はかない」感情であると考えられる。

天囚がこの印に込めた思いはどのようなものだったであろうか。もちろん中国古典に通じていた天囚は、そうした漢詩の主題については充分理解していたと想像される。ただ、懷徳堂復興運動を通じて天囚が抱いていた思いとは、単なるはかなさではなかったであろう。江戸時代の大坂学問所に思いを致し、それを復興するという強い意志が込められていたと考えられる。

そして、その復興を天囚は自身の「文」の力によって推進した。大阪府立図書館の初代館長今井貫一らと大阪人文会を組織した天囚は、その例会で、初期懷徳堂の五井蘭洲について講演し、懷徳堂の顕彰に努めた。また、朝日新聞に「懷徳堂研究」を連載して、享保九年（一七二四）の懷徳堂創立以来の歴史について解説していった。漢学者天囚ならではの仕事であった。種子島の西村家に残されていた「文章報国」印や「儒素傳家」印なども、文章と漢学によってこの世に貢献しようという天囚の姿に重なって見える。

さらに、天囚の研究と著作の形成という観点から、極めて興味深い印が発見された。97「私案 異説」の両面印、98「参看 折衷」の両面印である。これらは印譜には鈴印されていないが、実は、これを実際に鈴印した資料が、やはり種子島で発見された。鉄砲館に保管されて

集釋 自學而至泰伯第八章 未刊」「首に集釋を挙げ、次に折中參看異說私案の四目を立て、其の足らざるところを補はる」とある。

種子島の鉄砲館に保管されていた『論語集釈』草稿は全二冊。一冊目が卷一（学而・為政）と卷二（八佾・里仁）、二冊目が卷三（公冶長・雍也）と卷四（述而・泰伯）となっていて、「目録」の記載と見事に合致している。これこそまさに、行方不明だった天囚の『論語集釈』草稿である。さらに興味深いのは、その印記である。巻一の第一葉を確認してみよう。



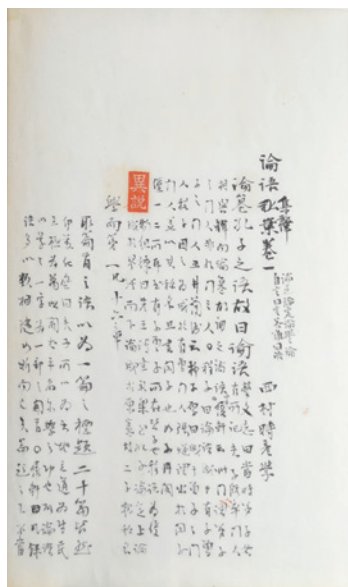
「参看 折衷」両面印



「私案 異説」両面印

いた天囚関係資料の中に、長く所在が不明であった天囚の『論語集釈』草稿が残されていたのである。これまでも、「碩園先生著述目錄」（『懷徳』第二号、一九二五年）には名があがっているが、その実物の存在は知られていなかった。「目錄」によれば、「論語

すると、内題に「論語私案」と一旦書いた右に、見せ消ちで「集釋」と訂正していることが分かる。<sup>9</sup>また、注釈の冒頭に、「異説」という陰刻の長方形印が押されていることも確認される。



『論語集釈』巻一冒頭

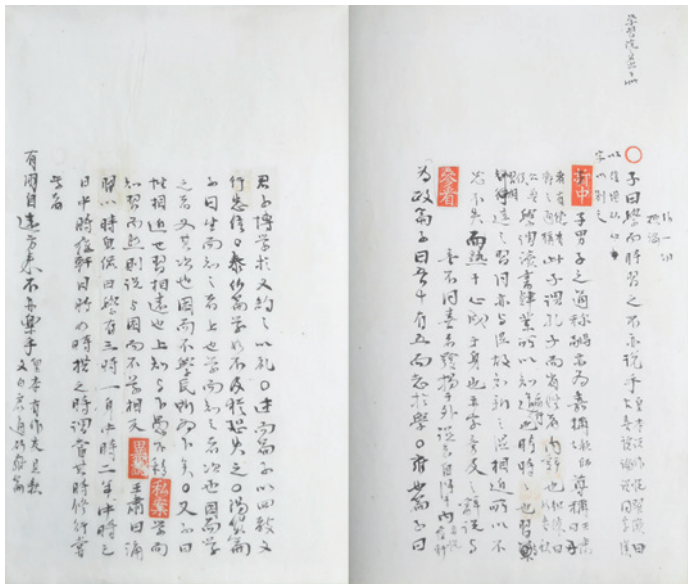
念のため、次の葉も開いてみると、そこにも、学而篇冒頭の「子曰、學而時習之、不亦說乎」の本文に対する天囚の注に「折衷」、「参看」、「私案」、「異説」の印が押されていることが分かる。「目録」には、「折中參看異說私案の四目を立て」とあったが、これらの印記こそ、種子島の西村家に残されていた97「私案 異説」の両面印と98「参看 折衷」の両面印によって鈴印されたものである。『論語集釈』の印記では計四つの印に見えるが、実

は二つの両面印によって押印されたものであったのである。

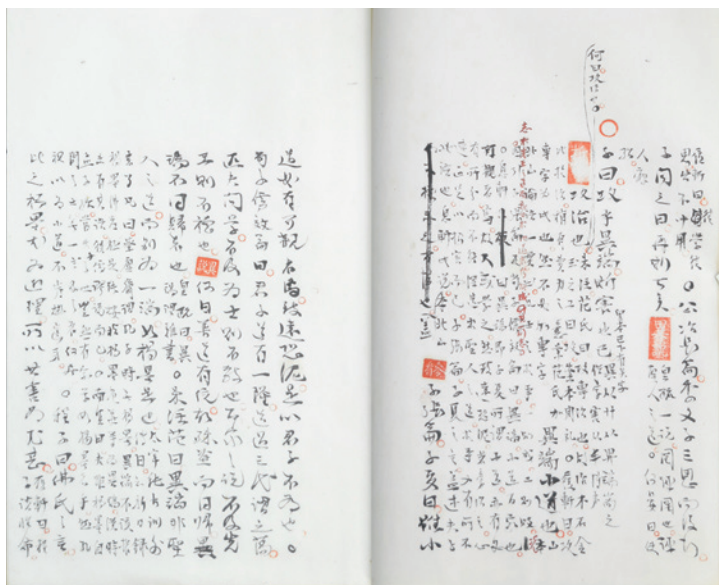
このように、天囚は自身の『論語』注釈書を編纂しつつあり、また各注釈の種別を分かりやすく表示するため、これらの印を使って、仕分けしていたと推測される。例えば、「異説」とは、『論語集解』や『論語集注』など定番の注釈書とは異なる見解を附記したものであり、この第一葉では、荻生徂徠の説が引かれている。「参看」とは参考として提示する他の見解、「私案」とは、天囚自身の独自の見解、というものであろう。

ただし、「目録」には、「首に集釋を擧げ」とあるが、ここに「集釋」の印記は見えず、また「集釋」という長方形印は西村家からは見つからない。あるいは、この「集釋」は印のことではなく、天囚の『論語集釈』の地の文を指していた可能性もある。つまり、第一葉で言えば、冒頭本文から「異説」の印記の前までが、「集釋」だったという可能性である。こう考えれば、天囚旧蔵印の中に「集釋」の印がなかった理由も一応理解できる。

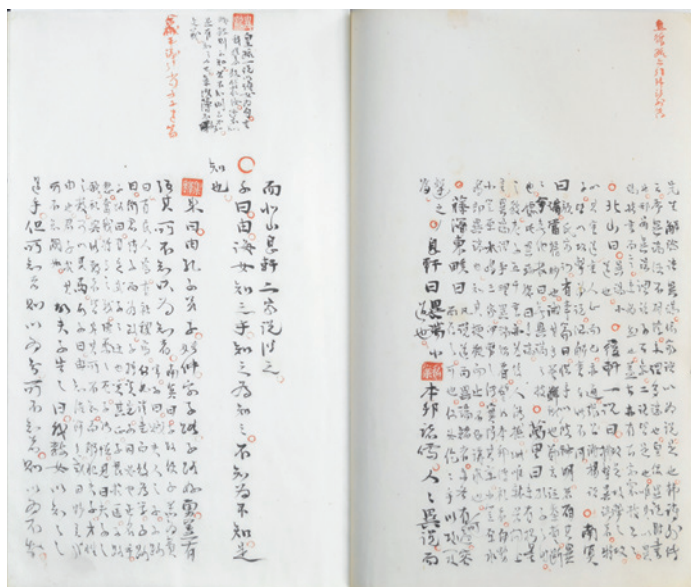
ところが、一冊目の為政篇「子曰、攻乎異端」章から、印の形が一変する。この章の冒頭の注については「折衷」の長方形印が見られる。これは従前通りである。ところが、その後は、やや扁平で小振りの「参看」や「異説」印となる。楷書で刻印されているのは長方形印と同様で



『論語集釈』の「折衷」「参看」「私案」「異説」印



『論語集釈』為政篇攻異端章の印記



『論語集釈』為政篇の「集釋」印

あるが、文字は縦組ではなく、横組となっている。さらに、次の「子曰、由、誨女知之乎」章に至ると、そこに「集釋」印が押されているのである。以後、第二冊の終わりまで、この扁平の「集釋」「折衷」「參看」「私案」「異說」の五種類の印記が確認される。この形の印は種子島の西村家には残されていなかった。

これは、どのように理解すればよいであろうか。天囚の『論語集釈』が未完に終わっているのが謎というほかはないが、恐らく天囚は、はじめ全体を「集釋」と「折衷」「參看」「私案」「異說」に分けて記す方針を立て、「集釋」については冒頭の地の文がそれに当たるとし、それに続く注釈については、その性格の違いによって「折衷」「參看」「私案」「異說」の印を押しながら区別して書くこととした。しかし、後には、「集釋」そのものも印で明示することとし、それにあわせて、印を縦長ではなく、あまりスペースを取らない方形印にした。このように推測されるのではなからうか。

また、こうした方針をとったのは、天囚が江戸時代以来の漢学者の書き入れを多数見ていて、それらが分かりづらいつと感じていたことも一因ではなからうか。例えば、江戸時代の懷德堂を代表する学者中井履軒なかいりけんの『論語雕題だうだい』は、欄外に多くの書き入れがあるが、履軒自身にも

分かりづらくなつたため、後に履軒は、それを基に『論語雕題略』に集約し、さらに再編集して最終形態とし、『論語逢原』を完成させている。天囚は、こうした書き入れ方式では、自分自身も、また当然読者も分かりにくいと判断し、数種の印記によって仕分けしながら草稿を書き進めたのではなからうか。新聞記者として常に多くの読者を想定して原稿を執筆していた天囚は、自身の研究についても、視覚的にできるだけ分かりやすく、後に刊行する場合にも混乱が生じないよう配慮していたのではないかと考えられる。印の文字が篆書ではなく楷書で刻まれているのもそのためであろう。

なお、こうした方法は、この『論語集釈』だけではなく、天囚の他の草稿類にも見られる。晩年、研究に取り組んだ『楚辭』についても、例えば、天囚手稿本の『楚辭集釈』には、「集釋」「存異」「私案」の三つの印記が確認されている。印の形は、『論語集釈』のいずれの印とも少し異なる扁平である<sup>10)</sup>。

それらがいずれも陰刻であることは何か意味があるのだろうか。もちろん、陰刻の方が、陽刻に比べて朱色の面積が大きくなり、紙面に映えるという判断があっただろう。ただ、こうした表示方法は、天囚が独自に開発したものでなく、中国明代頃に普及していく木版印刷の



冊子に、そのアイデアが見られるものである。特に、中国の百科全書「類書」は先行する多くの文献から該当部分の字句を抜き出し項目ごとに分類して提示するという独特のスタイルをとるが、多数の文献から引用した字句を分かりやすく提示するために、見出し語を付ける場合がある。しかもその見出し語は「白抜き文字」によって印刷される。これは印における陰刻と同様の効果を持つもので、読者への配慮から考案されたものであろう。<sup>(1)</sup>

日本の明治期の図書でも、こうした工夫を施したものがある。例えば、明治四十四年（一九一）刊行の久保天随『孫子新釈』は、各篇の冒頭に、白抜き文字で「篇意」、その後、各本文の注については、「字解」「文義」「餘論」を同じく白抜き文字で掲げつつ注釈を記している。天囚も、中国の木版印刷の影響を受けて、後に自身の著作として刊行する場合にその注の類別を白抜き文字で表記しようと考えたのではなからうか。刊行間際になってからそうした仕分けをするのではなく、草稿段階から陰刻の印によって区別しつつ書き進めたのである。

いずれにしても天囚は、注の種別ごとの印を何種類か持っていたと推測される。種子島で発見された印章と印記は、こうした天囚の研究・執筆の姿勢と過程を示す極めて重要な資料であった。

## おわりに

大阪大学懷徳堂文庫は約五万点の資料群から成るが、文献のみではなく、実は、貴重な器物類も多数含まれている。江戸時代の懷徳堂に由来する書画、屏風、版木などであり、その中でも特に異彩を放つのは二百点を超える印章である。印章は、小振りな資料ではあるものの、その印面や紐の造形からは、懷徳堂の学術的特色や歴代教授の性格もうかがうことができる。小さな印の中に懷徳堂の歴史と思想が凝縮されていると言ってもよい。<sup>(2)</sup>

懷徳堂記念会は、大正元年（一九一）、中井家子孫の中井木菟麻呂が所有していた中井竹山・履軒らの印章を借用して『懷徳堂印存』という印譜を作成した。この印譜の跋文を書いたのが西村天囚である。その中に、印章についての天囚の思いが次のように語られている（原文は漢文）。

夫れ図章ずしょうとは、上は天子てんし自り、下は庶人に至るまで、用いて以て信を示す。而して学士文人の用うる所、文は典雅たうたを尚たうとび、其の寓意は深きなり。人を感じしむるや窮まり無きなり。徳容風範とくようふうはん以て彷彿ほうふつすべし。



図章（印章）は人の「信」を示すものであるという。さらに学士や文人が用いる際には、その文は典雅を尊び、その寓意は奥深く、人を強く感動させ、その人の高い徳や風采を髣髴とさせるといのである。江戸時代の懷徳堂の印章を見て、天囚はこのように実感した。このことは、自身の印の整理と印譜の制作とについても、少なからず心を動かしたのではなからうか。晩年、東京で鈴印されたと思われる巻紙の印譜には、なお多くの余白が残されていた。天囚の印譜は未完であったのか。

約百顆の印は郷里種子島に帰り、今も、天囚の「徳容風範」を放ち続けているのである。

## 注

- (1) 種子島における資料調査については、湯浅邦弘・竹田健二・佐伯薫「西村天囚関係資料調査報告―種子島西村家訪問記―」（『懷徳』第八十六号、二〇一八年）参照。
- (2) 小野則秋『日本の蔵書印』（臨川書店、一九五四年）は、西村天囚の蔵書印として「天囚図書」があったとするが、印譜にも、種子島で発見された百顆の中にも見えない。また同書には、印影が掲載されていないので、「天囚図書」印がどのような形や篆刻であったのかは分からない。
- (3) この資料の詳細については、湯浅邦弘編著『増補改訂版懷徳

堂事典』（大阪大学出版会、二〇一六年）参照。

- (4) この扁額が種子島の西村家で発見されたことについては、注

(1) 前掲の報告参照。

- (5) この画帖および天囚の題辭については、拙稿「西村天囚『欧米遊覧記』と御船綱手「欧山米水帖」―明治四十三年「世界一周会」の真実―」（『大阪大学大学院文学研究科紀要』第六十一巻、二〇二一年）参照。

- (6) このアルバムについては、注(1) 前掲の報告参照。

- (7) 鉄砲伝来紀功碑文の詳細については、拙稿「鉄砲伝来紀功碑文の成立」（島根大学教育学部国文学会『国語教育論叢』第二十七号、二〇二〇年）参照。

- (8) 住谷孝之「中国文学における「懷古」主題の形成―漢代から六朝までを中心に―」（『中国詩文論叢』第三十七集、二〇一八年）参照。

- (9) 第一冊の表紙題簽も、「論語」の次に紙を貼ってそこに「集釋」と記されている。恐らくその下には訂正前の「私案」の二字があったと思われる。

- (10) この『楚辞集釈』の印記については、平成三十年（二〇一八）十二月九日に大阪大学で開催した第二十八回懷徳堂研究会の際、矢羽野隆男氏の研究発表「西村天囚の学問と『論語』研究と」によってご教示いただいた。

- (11) 中国の類書については、拙著『故事成語の誕生と変容』（角

川叢書、二〇一〇年）参照。

(12)

江戸時代の懷徳堂印については、拙著『墨の道印の宇宙―懷徳堂の美と学問―』（大阪大学出版会、二〇〇八年）参照。なお、大正元年刊行の印譜『懷徳堂印存』について、後藤憲一編『邦人印譜目録』（青裳堂書店、二〇〇二年）は、「中井竹山ら私印譜、西村天囚編」とするが、懷徳堂印には、前川虚舟篆刻の「大阪府学教授」印、「懷徳書院教授」印などの公印も含まれるので、単なる「私印譜」ではない。

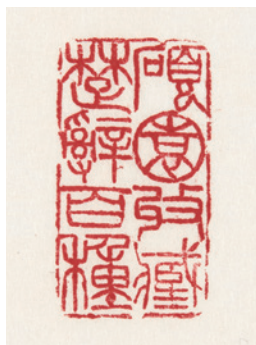
## 【附記】

・本稿は、公益財団法人三菱財団二〇一九年度研究助成「天声人語」の名づけ親西村天囚の見た近代日本」による研究成果の一部である。

・西村天囚『論語集釈』は、令和二年（二〇二〇）九月、島根大学の竹田健二教授が種子島開発総合センター（鉄砲館）における資料調査で確認され、筆者に情報提供いただいた。この資料の掲載については、鉄砲館のご許可を得た。画像データについては、西之表市教育委員会社会教育課文化財係長の鮫島斉氏、西之表市役所企画課歴史文化活用係主事の荒河翼氏に格別のご高配をいただいた。ここに厚く御礼申し上げたい。

・天囚旧蔵印の整理調査については、佐伯薫、黒田秀教、

佐藤由隆、菊池孝太朗、六車楓の各氏の協力を得た。



52 「碩園收藏楚辭百種」



51 「小天地閣珍藏」



57 「天囚書室」



55 「碩園珍藏」



02 「艸不除軒」



01 「天囚居士」



33 「南島世家」



21 「平時彦印」



45 「文章報国」



18 「懷古」

西村天囚旧蔵印一覧表

| 陽刻・陰刻 | 匡郭    | 法量（縦×横×高）   | 側款     | 印材 | 鈕の意匠      |
|-------|-------|-------------|--------|----|-----------|
| 陽刻    |       | 2.5×2.6×8.4 |        | 石  | 蓮         |
| 陽刻    |       | 2.6×2.6×8.5 |        | 石  | 蓮         |
| 陰刻    |       | 2.0×2.0×4.2 | ○      | 石  | 獅子        |
| 陽刻    | 無郭    | 2.2×1.0×5.9 | ○      | 石  | 獅子        |
| 陰刻・陰刻 | 無郭    | 1.3×1.3×7.1 | ○      | 石  |           |
| 陰刻・陽刻 | 陰刻は無郭 | 2.1×1.2×4.1 |        | 石  | 猿         |
| 陰刻    |       | 2.5×2.5×6.1 | ○      | 石  | 獅子        |
| 陰刻    | 無郭    | 2.2×2.2×6.0 | ○      | 石  |           |
| 陽刻    |       | 2.2×2.2×6.6 | ○      | 石  |           |
| 陰刻    | 無郭    | 1.9×1.9×3.9 | ○      | 木  | 有、植物？     |
| 陽刻    |       |             |        |    |           |
| 陽刻    |       | 1.3×1.3×3.5 | ○      | 石  |           |
| 陰刻    | 無郭    | 1.9×1.9×4.1 | ○      | 石  |           |
| 陰刻    | 無郭    | 2.0×2.0×6.3 | ○      | 石  | 獅子        |
| 陽刻    |       | 2.1×2.0×6.2 | ○      | 石  | 獅子        |
| 陽刻    |       | 1.2×1.2×4.6 | ○      | 石  |           |
| 陽刻    |       | 2.5×2.5×5.5 | ○（上部）  | 石  |           |
| 陰刻    | 無郭    | 2.6×1.9×3.9 |        | 石  | 雲・鳥？      |
| 陽刻    |       | 5.0×2.3×3.1 | ○（絵）   | 石  |           |
| 陰刻    | 無郭    | 2.7×1.5×5.2 | ○      | 石  |           |
| 陰刻    | 無郭    | 2.6×2.6×8.3 | ○      | 石  | 植物の絵      |
| 陽刻    |       | 2.6×2.5×8.7 | ○      | 石  | 植物の絵      |
| 陰刻    | 無郭    | 2.7×1.2×6.1 | ○（横・上） | 石  |           |
| 陽刻    |       |             | ○      | 石  |           |
| 陰刻    | 無郭    | 2.8×1.4×7.1 |        | 石  | 獅子        |
| 陰刻    | 無郭    | 1.6×1.6×3.3 | ○      | 石  |           |
| 陰刻    | 無郭    | 1.4×1.3×4.1 | ○      | 石  | うさぎ       |
| 陽刻    |       | 2.5×1.5×5.9 | ○（上部）  | 石  |           |
| 陰刻・陽刻 | 陰刻は無郭 | 1.6×0.7×4.7 | ○      | 石  |           |
| 陰刻・陽刻 | 陰刻は無郭 |             |        |    |           |
| 陽刻    |       |             |        |    |           |
| 陰刻    | 無郭    | 2.7×2.7×5.9 | ○      | 石  | 上部にデザイン   |
| 陽刻    |       | 2.8×2.7×5.8 | ○      | 石  | 上部にデザイン   |
| 陰刻    | 無郭    | 3.7×1.8×5.5 | ○      | 石  |           |
| 陽刻    |       | 2.1×0.7×5.0 | ○      | 石  | 側面に桃のデザイン |
| 陽刻    |       | 1.4×1.3×4.1 | ○      | 石  | 獅子        |
| 陰刻    | 無郭    | 1.1×1.1×5.8 | ○      | 石  | 蛙（紐穴）     |
| 陽刻    |       | 1.2×1.1×7.1 | ○      | 石  | 植物？の葉（紐穴） |
| 陽刻    |       |             |        |    |           |



表 1

| 通し番号 | 篆刻       | 現存確認 | 形状    | 特殊形状     |
|------|----------|------|-------|----------|
| 1    | 天囚居士     | ○    | 方形印   |          |
| 2    | 草不除軒     | ○    | 方形印   |          |
| 3    | 西村時彦     | ○    | 方形印   |          |
| 4    | 天 囚      | ○    | 方形印   | 連印       |
| 5    | 天囚居士 紫駿  | ○    | 方形印   | 両面印      |
| 6    | 村彦 子俊    | ○    | 方形印   | 連印       |
| 7    | 村彦子俊     | ○    | 方形印   |          |
| 8    | 西村時彦     | ○    | 方形印   |          |
| 9    | 松町老隠     | ○    | 方形印   |          |
| 10   | 村彦子俊     | ○    | 方形印   |          |
| 11   | 臣時彦印     | ×    | 方形印   |          |
| 12   | 碩園       | ○    | 方形印   |          |
| 13   | 天囚翰墨     | ○    | 方形印   |          |
| 14   | 村彦子俊     | ○    | 方形印   |          |
| 15   | 松町逸人     | ○    | 方形印   |          |
| 16   | 天囚五十以逸文安 | 鉄砲館  | 方形印   |          |
| 17   | 乾坤夾      | ○    | 方形印   |          |
| 18   | 懷古       | ○    | 長方形印  |          |
| 19   | 載？       | ○    | 変形橢円印 |          |
| 20   | 於焉逍遙     | 鉄砲館  | 長方形印  |          |
| 21   | 平時彦印     | ○    | 方形印   |          |
| 22   | 子俊氏      | ○    | 方形印   |          |
| 23   | 時彦       | ○    | 方形印   | 23と24で連印 |
| 24   | 子俊       | ○    | 方形印   | 23と24で連印 |
| 25   | 松柏有本性    | ○    | 長方形印  |          |
| 26   | 臣時彦印     | ○    | 方形印   |          |
| 27   | 子俊       | ○    | 方形印   |          |
| 28   | 多情之罪     | 鉄砲館  | 長方形印  |          |
| 29   | 時彦 子俊    | ○    | 方形印   | 連印       |
| 30   | 村彦 天囚    | ×    | 扁平印   | 連印       |
| 31   | 非詩人      | ×    | 長方形印  |          |
| 32   | 臣時彦印     | ○    | 方形印   |          |
| 33   | 南島世家     | ○    | 方形印   |          |
| 34   | 且於此中息    | ○    | 長方形印  |          |
| 35   | 天囚       | ○    | 橢円形   |          |
| 36   | 碩園       | ○    | 方形印   |          |
| 37   | 村彦       | ○    | 方形印   |          |
| 38   | 子俊       | ○    | 方形印   |          |
| 39   | 碩園       | ×    | 方形印   |          |

|  | 陽刻・陰刻 | 匡郭 | 法量（縦×横×高）    | 側款    | 印材 | 鈕の意匠   |
|--|-------|----|--------------|-------|----|--------|
|  | 陰刻    | 無郭 | 1.2×1.0×4.0  | ○     | 石  |        |
|  | 陰刻    | 無郭 | 1.1×1.1×5.7  | ○（四面） | 石  |        |
|  | 陽刻    |    | 1.2×1.2×5.9  | ○     | 石  |        |
|  | 陰刻    | 無郭 | 1.2×1.2×5.9  | ○     | 石  |        |
|  | 陰刻    | 無郭 | 1.1×0.9×3.7  |       | 石  |        |
|  | 陰刻    | 無郭 | 2.7×2.7×4.9  | ○     | 石  |        |
|  | 陽刻    |    | 2.8×2.7×5.0  | ○     | 陶器 | 犬      |
|  | 陰刻    |    | 2.6×1.6×4.5  |       | 石  |        |
|  | 陽刻    |    | 2.6×2.1×5.6  | ○     | 石  |        |
|  | 陰刻    | 無郭 | 2.0×2.0×5.9  |       | 石  |        |
|  | 陽刻    |    | 4.4×1.6×8.8  |       | 石  |        |
|  | 陽刻    | 太郭 | 2.8×0.9×7.7  |       | 石  | 獅子     |
|  | 陽刻    |    | 3.7×2.0×3.5  | ○     | 石  |        |
|  | 陽刻    |    | 2.2×1.5×5.7  |       | 石  | 魚2匹と波  |
|  | 陽刻    |    | 1.7×1.7×5.7  | ○     | 石  | 犬？     |
|  | 陽刻    |    | 2.5×1.2×7.4  | ○     | 石  | 獅子     |
|  | 陽刻    |    | 2.5×1.1×5.7  |       | 石  | 象の紋様   |
|  | 陽刻    |    | 2.0×2.0×1.7  | ○（四面） | 金属 | 鎖状     |
|  | 陰刻    | 無郭 | 2.4×2.4×5.4  | ○（上部） | 石  |        |
|  | 陰刻    | 無郭 | 1.0×1.0×4.6  |       | 石  |        |
|  | 陽刻    |    | 1.0×1.0×4.6  |       | 石  |        |
|  | 陰刻    | 無郭 | 1.0×1.0×3.0  | ○     | 石  |        |
|  | 陽刻    |    | 2.4×2.4×3.2  | ○     | 金属 | 三角形の紐穴 |
|  | 陽刻    |    | 4.7×2.1×6.4  |       | 木  |        |
|  | 陽刻    |    | 1.5（直径）×5.8  |       | 木  |        |
|  | 陽刻    |    | 2.5×2.5×6.5  | ○     | 石  |        |
|  | 陽刻    |    | 3.6×3.2×3.3  |       | 木  |        |
|  | 陽刻    |    | 3.2×3.2×3.8  |       | 石  |        |
|  | 陰刻    |    | 2.5×2.5×6.4  |       | 石  |        |
|  | 陽刻    |    | 2.6×2.6×2.6  | ○     | 石  |        |
|  | 陽刻    |    | 3.3×3.3×3.8  |       | 石  |        |
|  | 陰刻    | 無郭 | 2.2×2.2×7.3  | ○     | 石  |        |
|  | 陰刻    | 無郭 | 4.3×4.3×3.7  | ○     | 石  |        |
|  | 陰刻    | 無郭 | 4.5×4.7×12.5 |       | 石  |        |
|  | 陽刻    |    | 1.5×1.5×6.1  |       | 木  |        |
|  | 陽刻    |    | 2.2×2.1×7.0  | ○     | 石  |        |
|  | 陰刻    | 無郭 | 4.3×4.3×3.5  | ○     | 石  |        |
|  | 陰刻    | 無郭 | 1.9×0.9×5.9  |       | 木  |        |
|  | 陰刻    |    | 1.9×0.9×5.9  |       | 木  |        |

| 通し番号 | 篆刻             | 現存確認 | 形状   | 特殊形状      |
|------|----------------|------|------|-----------|
| 40   | 碩園居士           | ○    | 方形印  |           |
| 41   | 天囚             | ○    | 方形印  |           |
| 42   | 天囚居士           | ○    | 方形印  | 42と43で両面印 |
| 43   | 紫駿             | ○    | 方形印  | 42と43で両面印 |
| 44   | 清?             | ○    | 長方形印 |           |
| 45   | 文章報国           | 鉄砲館  | 方形印  |           |
| 46   | 儒素傳家           | ○    | 方形印  |           |
| 47   | 文章載道           | ○    | 長方形印 |           |
| 48   | 小天地閣善本         | ○    | 長方形印 |           |
| 49   | 天囚鑑蔵           | 鉄砲館  | 方形印  |           |
| 50   | 碩園珍藏先賢未刻書      | ○    | 長方形印 |           |
| 51   | 小天地閣珍藏         | ○    | 長方形印 |           |
| 52   | 碩園収蔵楚辭百種       | ○    | 長方形印 |           |
| 53   | 山房手鈔本記         | ○    | 長方形印 |           |
| 54   | 紫駿翰墨           | ○    | 方形印  |           |
| 55   | 碩園珍藏           | ○    | 長方形印 |           |
| 56   | 碩園鈔蔵           | ○    | 長方形印 |           |
| 57   | 天囚書室           | ○    | 方形印  |           |
| 58   | 天囚居士           | ○    | 方形印  |           |
| 59   | 時彦             | ○    | 方形印  | 59と60で両面印 |
| 60   | 子俊             | ○    | 方形印  | 59と60で両面印 |
| 61   | 時彦私印           | ○    | 方形印  |           |
| 62   | 村彦子俊           | ○    | 方形印  |           |
| 63   | 東京市外下大崎二三四西村時彦 | 鉄砲館  | 長方形印 |           |
| 64   | 天囚居士           | 鉄砲館  | 丸印   |           |
| 65   | 結翰墨縁           | 鉄砲館  | 方形印  |           |
| 66   | 西村時彦           | 鉄砲館  | 方形印  |           |
| 67   | 平時彦印           | 鉄砲館  | 方形印  |           |
| 68   | 村彦子俊           | 鉄砲館  | 方形印  |           |
| 79   | 左馬頭行盛裔         | 西村家  | 方形印  |           |
| 81   | 字曰士俊           | 西村家  | 方形印  |           |
| 83   | 西村時彦           | 西村家  | 方形印  |           |
| 84   | 平時彦印           | 西村家  | 方形印  |           |
| 85   | 寧誠士家           | 西村家  | 方形印  |           |
| 88   | 天囚居士           | 西村家  | 丸印   |           |
| 90   | 子俊氏            | 西村家  | 方形印  |           |
| 93   | 左馬頭行盛之裔        | 西村家  | 方形印  |           |
| 97   | 私案 異説          | 西村家  | 長方形印 | 両面印       |
| 98   | 参看 折衷          | 西村家  | 長方形印 | 両面印       |